

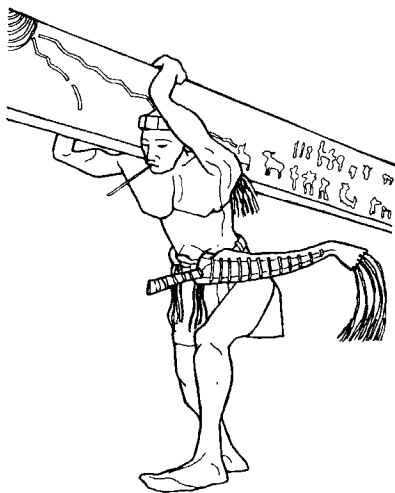
2

現代の桃源郷
台湾先住民が経営する

ブヌン・ビレッジ

桃源村* (台湾)

黄智慧——台湾中央研究院民族学研究所

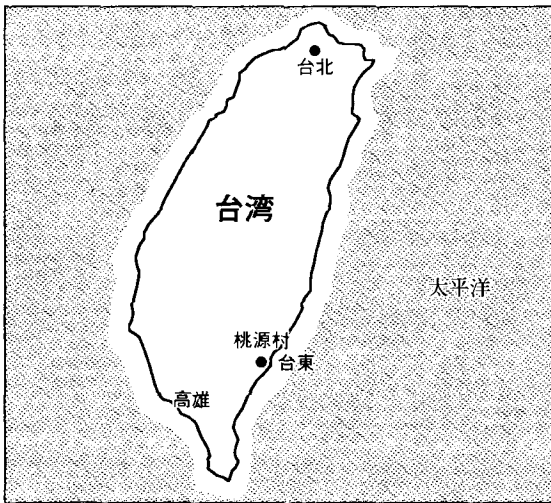


黄智慧 (こうい) ちえ

一九六〇年台湾に生まれる。一九九一年大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。

現在、台湾中央研究院民族学研究所助理研究員。専門は民族学、文化人類学。日本の植民地統治が現在の台湾に与えている影響、沖縄八重山諸島と台湾との民族的な関わり、また先住民族の現代社会における葛藤などについて関心を持っている。

論著には「台湾先住民の環境観—ダム建設反対運動の分析から—」,「The Yamatodamashi of the Takasago Volunteers of Taiwan: A Reading of the Post-colonial Situation」また、「二十世紀初期に出された貴重な民族誌資料『蕃族慣習調査報告書』の中国語編訳 (台湾文化賞受賞) などがある。



先住民の神話世界が展開する現代の桃源郷

台湾は日本にもっとも近い国の一つである。飛行機の旅はわずか二時間で着いてしまふ。そして、台北の松山空港から飛行機に乗って東海岸の南に位置する台東へ向かつて、四十分の道のりである。また、台東市から目的地の「ブヌン・ビレッジ」(中国語では「布農部落屋」)までも、車を運転すれば二十分もかからない。この距離では日本の国内旅行とそれほど所要時間が変わらない。

もし余裕があれば、台北より汽車に乗っての旅もいだろう。風光明媚な東北角海岸や怒濤の打ち寄せる断崖、そして花蓮の山間溪谷を経て、六時間かけてゆったりと景色を満喫してから、「鹿野」(ルレイエ)駅で下車すれば、ブヌン・ビレッジのちょうど足元である。この選択も悪くはない。

ブヌン・ビレッジがある場所は行政区画上、台東県延平郷に属する。村の名前は「桃源村」(タオユエンツン)という。あたかも晋の詩人、陶淵明(トウエンメイ)が描く桃花源の奥のユートピアのように、外線の一般道路(台九線)を通り過ぎるとき、ただ壮麗で堂々とした中央山脈が連綿と続くだけで、桃源村の入口はふと見過ごしてしまふ。

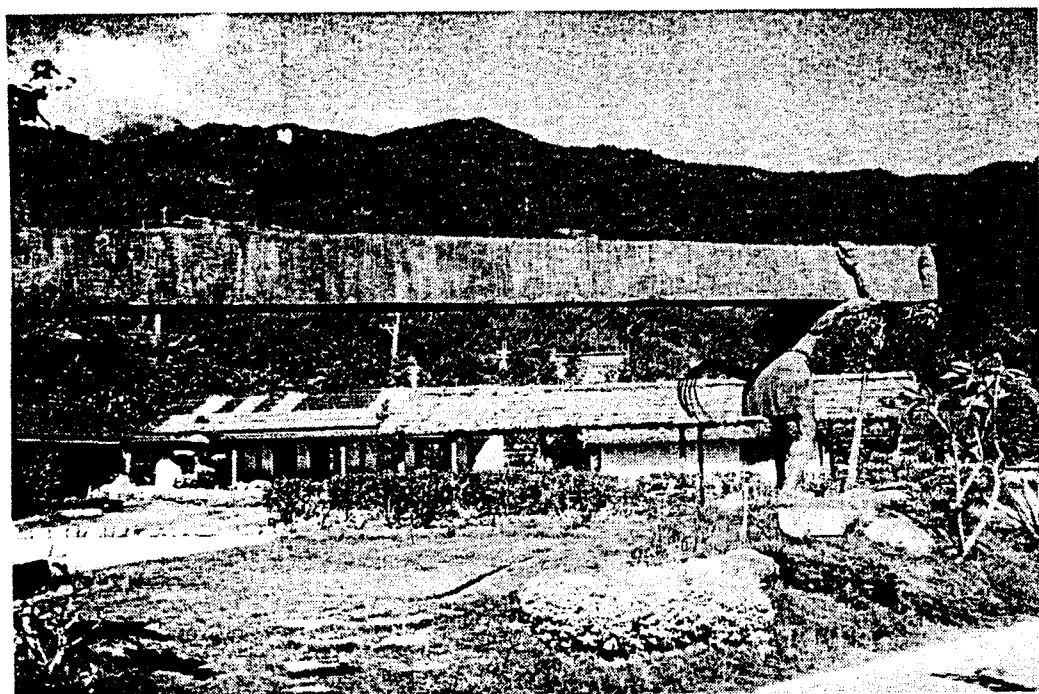
村は路傍の狭い小道から回って入って一キロもない所。豁然(カッゼン)として開かれ、周りを

山々に囲まれた田園の中に、百戸足らずの家がある。住んでいるのは、主にブヌン族の人々である。

ブヌン・ビレッジは村の中ではなく、少し離れて川縁に位置している。この川はもとと大きい川だったが、なぜか近年枯れてきている。それでも、川の辺りからの眺めはよく、周囲の緑の山々とマッチして、なかなか風情がある。しかしながら中央山脈にある、例えばタロコ渓谷や阿里山などの、随所にあふれた絶景と比べれば、景色だけで旅人の足を止めるほどの場所とはいえない。だが、あえてここでレジャー施設が開業されたのは、それなりに理由がある。

現在、ビレッジの従業員は三十人余り。百二十人を収容できる宿泊施設を経営している。宿泊客のペンションは現地の原木を使用したログハウス風の建築物で建てられている。比較的大きいのが開放式の劇場（三百五十人収容可能）一棟、それに同じ人数が収容可能な大食堂がある。ほかに木の小屋がもう一棟あり、先住民現代アーティストたちの作品を主に展示している。そして喫茶店が二軒あって、使われている机、椅子から、さらに壁の上の壁画に至るまで、人間の頭や蛇、イノシシ、鹿などをモチーフとした彫刻作品で埋め尽くされている。

これらのモチーフは先住民の神話世界と深くかかわっている。



静かな田園風景の中に宿泊施設、劇場、食堂などが立ち並ぶ

入口からブヌン・ビレッジの園内に一歩足を踏み入れて、すぐさま目に映るのが道の傍らに立つ一つの巨大な銅像である。これは腰に山刀やまがたなを差した二人の青年が、切り倒したばかりの一本の巨木を、力強く背負い上げた瞬間のフォルムを造型している。作品のタイトルは「希望の工程」。

ブヌン・ビレッジの経営方式はテーマ・パークとやや似ている。宿泊しない観光客の入園費は台湾ドル百元（日本円にして約三百円余り）。この百元で、道の至る所に見られる先住民の石彫り、木彫り、陶芸などの芸術作品を鑑賞し、またアーティストたちのその場での製作過程を見学できる（現在、四人の先住民芸術

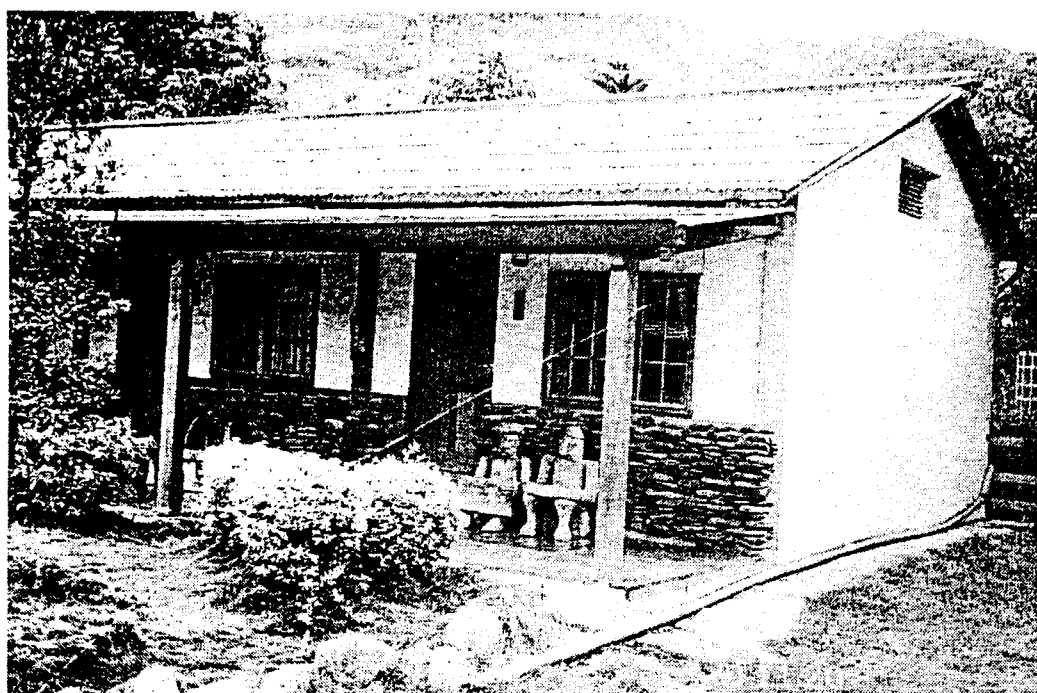
家が村に住んでいる。さらに喫茶店で一杯飲んで一息つける。この一杯はサービスである。

土、日曜日には決まって、毎日午前と午後二回、歌と踊りのパフォーマンスがあつて、普段より多くの観光客をひきつける。他の日には、客はかなり少ない。静かな田園風景の中に聞こえるのは、ただのどかな鳥の鳴き声と、ときおり伝わってくるアーティストたちの石板を刻む音だけである。

勇気のある一人の男が拓いた自主独立への道

正直な話、台湾の観光旅行といえば、アジアの他の地域と比べた場合、美味しい中華料理、華麗な故宮博物院の収蔵品の外に、一体どんな特色が思い当たるだろうか。高度の経済発展と成長神話の背後で、人々が払った代価は、ゴミゴミとして騒乱とした都会の生活、そして公害汚染の脅威きょういにさらされた河川と田園であつた。

十六世紀当時、台湾は「フォルモサ」なる名称をもつて、初めて西洋の航海図の上に現れた。言い伝えによると、その名称の由来はすなわち、ポルトガルの船が東南アジアから日本の長崎へ貿易に向かう途中、遙か遠方に森林が鬱蒼うっそうと茂り、山並みの雄大な一つの大きな島を望み、思わず「イラ・フォルモサ！（なんと美しい島だ）」と賛



ペンションは現地の原木を使ったログハウス風に建てられている

嘆したのが、命名の由来だという。

当時、島上の住民はすべて人類学上でいうところの「オーストロネシア語族」である。彼らは各々異なる時期に、別々の地域から台湾へ移ってきたらしい。島の上では無文字、無国家の多部族社会が、数千年の長きにわたって続いていた。

九州と同じぐらいの面積の台湾島は、今や人口がすでに二千万人に達した。

そのうち、絶対多数は十七世紀中葉以降になって初めて中国大陸の東南部の沿海地域から渡ってきた漢民族の末裔まっえいである。彼らは台湾西部の丘陵地帯を開拓して平地帯に変え、住んでいた先住民たちを通婚によって、同化させてしまった。

そのため、同化に抵抗し続けていた先

住民族は、現在、居住地域が中央山脈以東の広大な地域に残り、その総人口は台湾の二パーセントに至らない少数民族である。

彼らの住む高山や東部海岸山脈の山間地区は、かつて交通が遠く不便であり、土地も瘦せて貧しかった。したがって、農工業が発展できず、島内でも経済所得の最も低い地域であった。しかし、この十年のあいだに、状況は大きく変化した。

例えば台湾西部の大都会、高雄^{カオシヨウ}地区の住民は河川の汚染が深刻化し、各家々は町に出て自分で飲用水を購入しなければならない状況にある。かえって東部の居住環境が空気や水の品質において、全台湾において最高水準となった。この地域に与えられた称号を「台湾最後の楽園」という。

この地域の先住民族として、アミ、タイヤル、ブヌン、パイワン、ルカイ、プユマなどが住んでいて、それぞれ独特の言語と習俗文化を持つ。その中でもブヌン族は海拔が最高の地域に居住し、狩猟に秀で、強いテリトリー概念と大家族概念を持つ。一八九五年に日本の植民地政権が侵入した後、ブヌン族が全面帰順したのは実に一九三〇年代になってからで、先住民族のうち、最後まで抵抗を続けた部族である。

戦後、中華民国政権は日本帝国に取って代わった。先住民族は経済の劣悪で困難な状況と悪戦苦闘しながら、一方で、中華文明の文化教育政策による同化への危機にも

対抗しなければならなかった。

ところが、この十数年間、戒嚴令の解除に伴って、先住民の政治面における復権運動が盛り上がってきた。そして、台北の政治舞台の上では、憲法上の正式名称運動、土地返還運動、その他さまざまな差別と不平等に対する激烈な抗議運動等が繰り広げられ、多くの反抗のヒーローたちを生み出してきた。

この激烈な抗争の波の中で、ある一人のブヌン族の男が、他の闘士たちと異なる道筋を選んだ。彼は台北を離れて故郷の村に帰り、教会の牧師となることから活動を始めた。現在、牧師は彼の副業にすぎず、主な事業は自分たちの民族文化の発展振興を目指す「ブヌン文教基金会」を主宰することである。この基金会の収入源はブヌン・ビレッジという、そのユニークさを売り物としたペンションの経営である。

青壮年の流出を防ぐ独自の地域振興業

ブヌン・ビレッジの経営母体——ブヌン文教基金会は、一九九五年に成立した、台湾において初めての、原住民を主体に設立された基金会である。理事長——ビュン（中国語名：白光勝^{バイクワンズン}）牧師（四十六歳）は自身が小児マヒの障害を持ち、いつも杖を ついて歩いている。彼は幼い頃から就学や就職のたびに、社会における先住民や障害

者に対する差別や挫折を経験した。そのため、誰よりも弱者の立場を理解している。

八〇年代後半、彼は故郷の村に帰り、桃源村でキリスト教長老派教会の牧師を担当した。神の福音を宣揚し、民族の人々の荒れ果てた魂を慰めようとした。だが、彼は経済上の現実及び文化継承の断絶といった問題にぶつかり、ただ宗教信仰の力に頼るだけでは解決できないと悩み続けていた。

そんななかで白牧師は教会において、まずは教育に熱心に力を注いだ。村落の青少年を集め、勉強の面倒を見たり、奨学金を提供したり、ブヌン語幼稚園を設立したりするなどの努力もしていた。だが、彼は青少年が非行に走る問題の背後にある原因とは、父母の不在と家庭の崩壊にあることが分かってきた。

この頃から村落内で伝統文化の祭儀や行事を維持し、伝統の威信を保つということも、青、壮年層の不在によって、後継者がいないという危機に直面し始めた。

問題の本質は青壮年の人口の流出にあり、その原因は就業機会の欠乏であることが明らかにってきた。

戦前の日本植民政府、そして戦後の中華民国政権も、ともに先住民に経済上の自主権を与えなかった。前者は彼らを極力、狩猟や焼き畑の山地生産形態から、水稲定住農耕の農民に変えてしまおうとした。そして伝統的猟場を国有林として没収してしま

った。

後者は台湾西部の需要のみを考慮し、彼らの持つわずかな土地を半強制的に植林地に規定し、植林事業を奨励した。しかし植林が十数年を要することを全く考慮することなく、その期間、先住民は現金収入が全くなかった。

また、先住民たちが保有し居住する土地は、「山地保留地」と呼ばれていて、この土地は漢人と交易して売買することが許されなかった。そのため銀行の借金の担保品として当てることもできず、現代企業に参入する機会がほとんど奪われてしまったのである。

このような状況の下で、先住民の若者は大量に都会に流出し、男性は体力が強健なため、大抵は日雇いの土木工事などの労働に従事したり、あるいは船員として遠洋漁業に出かけた。土木工事はすぐに日当が稼げるし、遠洋漁業の場合は一枚の契約書にサインしただけで前金が入るからである。

そして女性もまた土木工事現場に付き添って稼ぎ、あるいはさらに下層の仕事を強いられてきた。村落中に残されたのは老人と子供ばかりで、学校教育の場面でも、テレビメディアが流すのも、漢民族のアイデンティティを主体とする同化教育を目的としたものであった。この悪循環を止める方法とは、とにかくまず先に、青、壮年を村

一落に引き止めておくことである。

現在、世界の多くの辺境地や過疎^{かそ}化の地区でも、しばしば人材を引き止めるために用いられる対策として、大型リゾートホテルが導入される。これによって少なからずの就業機会を生み出すことができる。

しかし、この種の地域振興方法は、外来の資金の誘致によるもので、たとえ仮に成功したとしても、その収益はすべて企業回収され、持ち去られてしまう。同時に、外来資本はその地方の文化伝承には責任も興味も全く持たない。地域の人はただ単純に労働力を提供するのみにすぎない。

いろいろと思いめぐらしたあげく、白牧師はまず父親を説得し、実家のわずかばかりの二ヘクタールの農地を寄付してもらった。

そして宿泊施設と、有機農業、文化資源とレジャー活動といった複合型の経営方式を結合し、経営母体の運営が自立できた際、同時に文化伝承と社会福祉を進行させることを頭に描いたのである。

彼が常に口にする名言がある。「ブヌンに一匹の魚を与えるより、一本の釣竿を与えるに如かず」（ブヌン語で「ブヌン」とは「人間」という意味に当たる）。このような信念を訴えて、彼は奔走して募金を集め、ついに社会各界の共鳴を得た。その結果、

日本円にして一千万円くらいの募金が集まり、基金会を成立させることができた。そこから前代未聞の実験プロセスが開始されたのだった。

獣肉分配と贈与の原理は今も生きている

その名をブヌン・ビレッジという釣竿は、成立して五年以来、滞りなく拡充を続け、実験し、改良を加え、まずまずの成功を収めてきたといってもいいだろう。目下の所、職員の数はずでに三十数名に達した。彼らのビレッジ内における仕事ぶりは、現代企業のスペシャリストの職員には想像もつかないかもしれない。

具体的にいうと、彼らは平日には、草花の手入れをする庭師であったり、部屋を建てる大工である。また女性は織物教室の機織はたおりの名手であったり、あるいはコンピューターの前でホームページを制作する技術者であったりする。

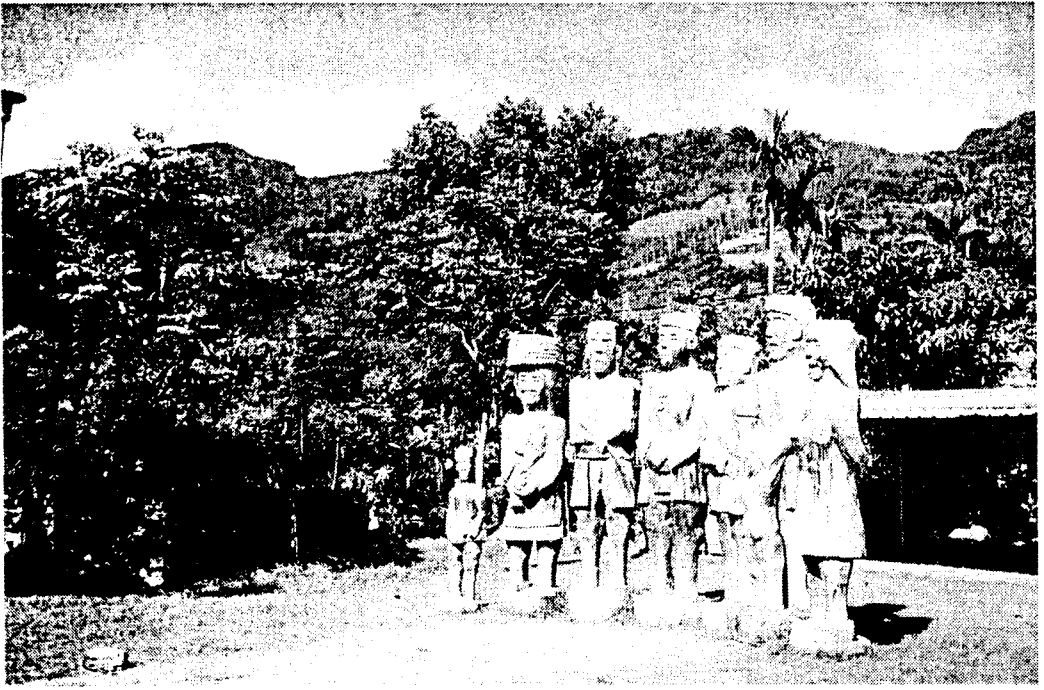
ところが、劇場パフォーマンスの時間ともなれば、仕事をひとまず手放し、一人ひとりが楽器を手にして四十分間のプログラムを演じる。そしてパフォーマンスが終われば、彼らはただちに喫茶店に駆けつけ、エプロンを巻いて、コーヒーを作ったり、あるいはレストランで山猪や鹿の肉を焼いたりして、園内の観光客にサービスする。日曜日の朝六時は、職員とその家族の礼拝の時間である。今度はそれぞれ長老、執事

などの役員となり、奉仕をし、交代で賛美歌をささげ、牧師の説教に耳を傾ける。

さて、台湾先住民各族の中で、ブヌン族は最も典型的な父系氏族社会といわれる（他のエスニック・グループ、例えばアミ、プユマ族は母系氏族に近く、パイワン族のような双系による継承が可能なグループもいる）。その居住形態もまた、父系氏族の成員を主として比較的大きい集落を形成し、共同で獵場を所有する。

このような氏族社会の中で、彼らはある独特な共有と分配の社会運営哲学を發展させた。人類学者・馬淵東一氏はかつてそれを「獸肉分配と贈与の原理」と呼んで論文で分析している。その原理の運営の下で、狩りの獲物の分配範囲と贈与の対象、粟あわを植えるときの共食の参与者などについて、細かい禁忌きんじと規定がなされている。

通常、彼らが集団性の狩獵を行うとき、人数の多少にかかわらず、狩りに出た家は、必ず獸肉を平均して分配される。特殊な大型の獲物、例えばイノシシの場合、まず射とめた者あるいは傷を負わせた者は皮、心臓、肺、腸などの内臓を得られる。そして先に射とめた者は、自身は決して獲物を追わず、最初に獲物に追いついた者、また獵物の屍体を発見した者は、頭、あるいは肉のついた足骨を分け与えられる。そして一番先に猪を追跡し出した犬の主は、尾を取る。その他の肉は、狩りに出た家庭に平均分配される。



ビレッジの至る所に先住民アーティストの石彫り、木彫りの作品が飾られている



スタッフによる歌と踊りのパフォーマンスは観光の呼びものの一つ

各家庭は獸肉を受け取った後、再びある原則に従つてその親族成員に再分配する。このため共同氏族の成員はみな資源を享受きやうじゆすることができ、その中で、強者（すなわち狩人が多い家）は必ず弱者の面倒を見ることになる。

このような緊密な限りない協力と社会経営哲学は、また彼らの歌唱のコンポジションにも生きている。

台湾先住民の各部族は、それぞれ異なつた音階と歌唱法を持つ。その中でも特にブヌ族は、最も和音を重視する。彼らのある伝統歌曲は、その名を「八部和音」といわれる。これは彼らが共同で狩猟に出かけるとき、あるいは種蒔きや開墾のとき、さらには家を建てるなどの仕事の前に、まず吟唱される。

数名の男子がお互い手をとつて抱き合い、一回りして円を作つて並び、和声を開始する。歌詞はなく、旋律もなく、ただ一人が「うー」という単音を出し始めた後、それをもつて基底音とし、もう一人の男子が半音階高い音を出し、続けてもう一人が再び半音階高い音を出す。

このように、たった一人から発せられた一つの音に続いて、その人数によって、和声部数が決まり、和声が形成されるのである。この吟唱がうまくハモれば、その日の仕事も順調にいくと信じられる。伝説によれば、これは彼らの祖先たちが蜂の羽音

を聞いて考え出したという。

彼らの集団の成員もまた、まるで蜂の社会のように限りなく協力しあう。

医療、福祉を目指した観光事業

ブヌン・ビレッジ内の歌舞パフォーマンスは、園内随所で見られる彫刻芸術作品と同じく、最も一日の入園参観の観光客を引き寄せる観光の目玉である。現在台湾には、ほかに二つ似たような先住民文化のテーマパークがあり、入園すると先住民の歌や踊りを鑑賞できる。

一つは中部の観光地日月潭リムユエタンの近くにある「九族文化村」で、私人の（漢民族）財団によって経営されている。もう一つは西南部の屏東ピンセントにある「台湾原住民族文化園區」で、これは政府によって設立されている。この二つの場所は先住民を雇ってパフォーマンスしているが、彼らはただ伝統の舞踏を表現するだけであり、音楽もテープを用いて流し、純粹に娯楽の機能を果たすに過ぎない。

それとは対照的に、ブヌン・ビレッジの歌舞パフォーマンスは、見終わった後、誰もが心に頗るオホシ重いものを感じるのである。これは徹頭徹尾、白光勝牧師の語りが見る者の心を深く動かすからである。

白牧師は一方でその伝統歌舞の含まれる意義を説明する外、漢人の観光客に向かつて「我々の友よ！」と呼んで、弱者である先住民の置かれる困難な状況を切々と訴える。

このほか、伝統を売り物にするだけではなく、彼らはまた積極的に新しい歌曲を創作し、現代劇団も結成させた。劇のパフォーマンス形式をもって社会大衆に先住民の苦境を訴えるのである。

一九九九年秋に、台湾中部においてここ百年以来、最大規模の地震が発生した。中部山間区の先住民村落は相当に深いダメージを受けた。再建の経費を募るため、幸い地震の難を逃れた東部地方にいる「ブヌン・ビレッジ」の劇団も台北、台中などの地においてチャリティー・コンサートと被災者支援の募金を行った。

また、台東地区で最も先住民の世話をしてきたのはキリスト教医院だが、二〇〇〇年春に老朽化した医療器材を取り換えるため、再建基金を募集した。ブヌン・ビレッジの一団もこのために奔走し、台東市においてチャリティー・コンサートを行った。

コンサートの収益金、日本円にして百万あまりを医院に寄付した時、当地の新聞報道の中で一つの面白い見出しが用いられた。「お金のない団体がお金のない団体を資金援助した！」と。彼らが実践する事業の中にも、獣肉分配と贈与の運営原理を垣間

見ることができると。

二〇〇一年から、ブヌン・ビレッジではまた一つ、新たな社会福祉事業が開始されようとしている。それは桃源村一円の、体の不自由な老人の在宅ケアである。白牧師自身が障害者であることもあって、彼がずっと夢に見ているのは、ブヌン・ビレッジの中に花園を作り、身体障害者や知的障害者を収容して、あたりの原野を耕し、その収穫物を観光客に売るのである。

また、桃源村の農家と有機農作物の契約を交わし、ビレッジの中で販売し、桃源村に還元するような方法も考えている。この理想は実現に向かって今一步一步進んでいる最中である。

マイノリティが自立するための基礎

台湾島は、古来より多くの民族が居住する地域である。民族紛争も古くから続いていた問題であった。

十七世紀後になって移入した漢人の中には、閩南系^{ミンナン}、客家系^{ハッカ}、及び第二次世界大戦の後に初めて移ってきた外省人たちがいる（正確にいえば、五十年の日本人の移民の植民の歴史もある）。その漢人の間にもしばしば深刻なエスニック・グループ間の衝突が

発生する。最も有名なのは戦後まもなく発生した二二八事件である。軍隊によって日本植民地教育を受けた知識人たちが大量虐殺され、その後、国民党政権が主導する台湾政治は五十年の長きに及んだ。

二〇〇〇年春の台湾総統選挙によって、有史以来初めての政権交代が行われた。その結果、選挙後すぐさま、外省人は国民党敗北の怒りを、党の主席である本省人の李登輝前総統の身の上に降り注いだ。そして島内には二者間（本省人と外省人）の、すなわちエスニック・グループ間の衝突が起こりかねない一触即発の情勢が出現した。新たに当選した民進党政権が直面した課題は、外部の中国大陸からの統一の脅威への対処のみならず、内部に対しても外省人の反発感情を慎重に処理し、エスニック・グループ間紛争の暴発を避けることである。

新政府は先住民の政策に対して、過去と大きく異なる点がある。選挙公約の中で先住民に若干の自治権を与えることを承諾したのであった。今は、蘭嶼（ランシュ、台東の東の島で、そこにいるタウ族は、台湾先住民の中で人口が最少）から自治区を徐々に成立させ始めるといっているのである。

当然、先住民はみなこれらの政策的発展を注意して見守っている。白光勝牧師もまたその中の一人である。彼が推進するブヌン・ビレッジの「希望の工程」の理想も、

その実情を見れば、自治の理想に近いといつていいだろう。

しかし、自治の夢に近づくまで、まずは己が力を培つちかわなければならぬ。これについて白牧師ははつきりと自覚している、マイノリティの自立の基礎とは、マジヨリテイとの間の和解と共存関係の上に立てられるものである、と。ブヌン・ビレッジが今日の規模になるまでには、基金会が成立する当初の募金の外に、その後も主にやはり募金に頼らざるを得ず、それによってようやく自力で運営し始めることができるようになったのだった。

もつとも、ここでやっている募金には一つ原則がある。つまり、タダで寄付を受けるわけにはいかないと。そこで、彼らは必ずそれ相応の品物（例えば音楽CD、織物、粟酒、木彫り、石彫りの品、あるいはビレッジの宿泊券など）で見返りのお礼にするのである。そのために、ビレッジの職員たちも日頃、相当努力してこれらのお礼の品を製作する。それというのも彼らには外界から与えられた援助とは、決してタダの「魚」ではなく、彼らに努力する方向を示すための「釣竿」であるという確信があるからである。

ついでにいうと、白牧師の御母堂ごぼどうはブヌン族、父君ちちぎみはパイワン族出身で、お二人の家庭での会話は植民地時代に教育された日本語である。また、母方のおじは、太平洋

戦争のとき、日本のために南洋の戦場で命をささげてきた高砂義勇隊たかさごぎゆうたいの一員でもある。桃源村から送り出された高砂義勇隊のなかで、彼一人しか生きて帰還してこなかったのである。今でも往時の話を伺えば、ニューギニア戦線での過酷な体験を淡々と語ってくれる。

このような環境で生まれ育つたため、白牧師も日本語を学校からではなく家族から教えられて、かなり堪能だ。李登輝前総統が接見した際には、日本語で会話が交わされたという。現在、ビレッジは沖繩キリスト教短期大学とも交流があり、それだけに日本人の客には親しみを感じている。

ブヌン・ビレッジ

住所：〒953 台湾 台東県延平郷桃源村11鄰191号

電話：+886-89-561211 FAX：+886-89-561409

ホームページ：http://www.bunun.org.tw